

令和元年度 幼稚園教育実習報告

幼稚園教育実習担当 矢津田由利・渡邊 輝美・石川千穂子・菅原 航平・島田 知和

令和元年度幼稚園教育実習は、大分県内はもとより、県外の公立幼稚園・私立幼稚園・幼保連携型認定こども園等で取り組んできた。1年次の観察実習は1週間、2年次の教育実習は3週間の期間で実施している。2年間にわたる教育実習指導の中で、日誌の記入や保育指導案の作成等の指導と合わせて、子ども理解や援助の仕方といった保育・教育の基礎、実習の目的や意義についても講義し、より具体的な指導・援助に結びつくよう指導を行なった。

*

1. 実習先 観察実習・・・初等教育科学生 158名（県内89件 県外4件）
教育実習・・・初等教育科学生 198名（県内106件 県外8件）
2. 実習期間 観察実習・・・令和元年9月4日～10日
教育実習・・・令和元年10月7日～26日

3. 教育実習の意義・目的

大学で学んでいることを具体的な体験を通して理解するとともに、身に付けた専門的知識や技術を実践する中で学習を深め、知識・技術を総合化し、応用力を身に付け、現場で得た課題を持ち帰って学習することにより、保育者としての意識や保育観・教育観を養う。

4. 教育実習の様子

- ・子どもたちと直接触れあい、生活を共にすることによって、その気持ち・欲求や発達の姿を理解する。
- ・子どもたちの生活を安定、充実させ、能力が伸びるための指導・援助の仕方について学ぶ。
- ・幼稚園等の機能・運営方針・環境・設備・人員配置等についての認識を深める。

5. 教育実習を担当して

学生にとって、幼稚園教育実習による4週間は、大変貴重な学びの場となっている。実際に子どもたちと一緒に幼稚園等で生活することによって、子どもたちの園での生活の様子や、保育者の援助などを直接体験することが、学生を大きく成長させている。さらに実習中における保育指導案の作成、日誌の記入など学生にとって、難しい課題においても保育者からの丁寧な指導や、大学による講義と結び付けることで、より確かな深い学びを得ることができている。

幼稚園教育実習で学んだこと

初等教育科2年 深田 晶

教育実習で学んだことはたくさんあります。一つ目は、子どもの遊びの展開力です。私が行った幼稚園では「遊ぶ」という活動が一日の流れの中で長くありました。そういった遊びの中で子どもたちの様子を見ていると、様々な物、ブロックなどを食べ物に見立てたり、遊びの中に取り入れたりなど、幼児は遊びの中で様々なことを学んでいくことが分かりました。そういった中に、どう関わっていけばいいのか分からず、つい子どもたちを見ているだけの状態になってしまっていたので、そこで保育者の方は、「これは何？」などの声かけや援助を行うことで、子どもは更に気づきやもっとこうしてみようなど、試行錯誤をして、どんどん成長していくのだと思いました。

子どもたちは喧嘩が多くあります。その仲立ちをするのも保育者としての役割だと思い、喧嘩全てに対して初めは援助していました。しかし、ブロックの取り合いをしていた子どもの喧嘩の中に入ろうとしたら、ほかのC君、が「A君が〇〇を使って、B君が〇〇を使えばもう喧嘩にならないんじゃないかな。」と声をかけました。それを見て私は、援助すべき所、見守る所の区別をつけることが大切だと思いました。すべてを援助していても子どもたちは、成長していくことができません。少し言葉を投げかけてみて、子ども同士の関わりを見守っていき、育っていく姿を援助していくことが大切と思いました。

また、その成長を保護者の方に伝えることが保育者としての役割だと思えます。保育者は子どもを迎えに来た保護者に、一人ひとり一日の様子を伝えていました。そういった、子どもの成長の喜びを共に共有していくことで信頼関係

が築かれていくのだということが分かりました。

子どもは、年齢はもちろん、一人ひとりの特性によつての援助が必要です。今回の実習で学んだのは、保育者は一人ひとりをきちんと理解した上での援助があるということです。子どものことを一番に考え、成長を見守る保育者は改めてとてもいい職業だと思いました。教育実習での経験を忘れず、これから立派な保育者になりたいです。

子どもの主体性を育む言葉かけの援助の大切さと難しさ

初等教育科2年 猪ノ口 沙季

幼稚園教育実習では反省が残りつつも、子ども達や先生方から深く学ばせていただいたことがあります。それは、保育の中で先生方が子ども達の主体性を特に大切に育てていることです。例えば、片付けの時保育者が「次の活動をするには、今、どうしたらいいのかな」などと言葉かけをし、子ども達が自分で考えて行動できるようにしていました。保育者と同じように援助しても塩梅が難しく、悩みつつも、子ども達に考えてほしいことを先に言うてしまうことが多かったのです。そこで、保育者と子ども達とのかかわりをよく見て、保育者の言葉かけや子ども達の反応を記録し、自分なりに省察しました。後日、同じような場面で自分なりに考えた言葉かけをしても、子ども達の反応は違い、また悩みました。そこで、さらに詳しく記録を取り振り返ってみると、大切なことに気付かされました。それは、保育者と子どもの信頼関係の強さと、保育者の一人一人への細やかな願いだったのです。数日間関わった自分と、入園後子ども達と共に過ごしている保育者とは、子

ども理解の深さや援助の意図も大きく違っていると学びました。しかし、自分なりに援助に何度も挑戦し、この学びを得たことは、教育実習の大きな成果であり、自分自身の成長にもつながったと思います。今回の実習では、子どもの主体性を育む言葉かけの援助の大切さと難しさを学ぶことができました。将来、このことを課題にして、失敗を恐れずに実践を重ねていきたいと思っています。

学生生活最後の実習で学んだこと

初等教育科2年 小井手 彩香

学生生活最後の実習となった幼稚園教育実習は、これまでの実習とは違う緊張感と充実感でいっぱいの実習となりました。期間が3週間と長いことから、今までは参加したことのない行事である運動会や大型避難訓練、誕生会等に参加することができました。その中でも運動会参加が私の中で一番多くの学びとなりました。

練習期間中は、子どもたちが苦痛にならないように毎日その日良かったところをまず褒め、もっと良くなる為にはどうしたら良いかを子どもたちに問いかける声掛け話し合いを行い、子どもたちと共により良いものを作り上げていく姿が見られました。

一方的に教師主導で指導するのではなく全員と一緒に作り上げていっていることに驚きました。当日は台風が直撃するという予報が出ていた為一度は延期になっていましたが、雨が降らなかったため決行されました。とても風が強かったので午前中だけのプログラムに変更したり普段なら簡単にできる障害物競走も、風でモノが飛ばされないように保護者の方々に協力して頂くように声をかけたり風が吹いた時に砂が目に入らないように目を瞑るように何度も注意

を行ったりする、保育者の方々の姿を見て、臨機応変にその場に応じた対応をすることの大変さややる気にさせる援助、声かけの工夫の仕方等を学ぶことが出来ました。

運動会後に感動している保護者の方々を多く見て、私もこのような素敵な運動会を子どもたちと「共に」作り上げることが出来る保育者になりたいと思いました。

子どもたちの頑張る姿が自分のパワー

初等教育科2年 中野 美彩

私は、幼稚園教育実習の3週間で様々な行事に関わらせてもらう中で、子どもたちの頑張る姿や協力する姿を見て、その様子から先生方の援助や学んだこと、感動したことがたくさんありました。

実習が始まって4日目、この日は遠足でおじかへ行きました。おじかでは、合言葉を目標にグループでアスレチックや秋の散策をしました。ある子どもがアスレチック中「怖い」と言って私たち実習生の手を持ったままでした。しかし、できるだけ、自分の力で登ったりして欲しかったので、どうしたら良いのかなと思っていた時、先生方が「大丈夫、できるよ」と声を掛けていて、その子は頑張って自分の力で登っていたので「できる」などのその一言がとても大切だと思いました。

もう一つの行事は運動会です。私たちは、運動会の練習から本番までの子どもたちの姿を見ることができました。練習をしていく中で、集中が途切れてしまい、砂を触って遊んでしまったりなどがあったので、運動会をどうやって頑張るのかということ子どもたちだけで話し合う時間がありました。その時間もあり、次の練習の時にはきちんと気持ちを合わせて、子ども

たちでやりたいと決めた競技を頑張っている姿がありました。頑張っている姿を見ていたので、本番当日、保護者の前でキラキラとしている様子を見て感動しました。改めて、子どもたちの頑張る姿に自分自身パワーをもらって、この3週間の実習をやり遂げることができたと感じました。

共に育ちあう保育実践との出会い

初等教育科2年 大石 美希

1、2年で実習させて頂いた幼稚園は、別府市の公立幼稚園でした。実習中に、1校1園制ならではの交流活動を体験させて頂きました。小学校の5年生が運動会で踊ったソーラン節と一緒に踊る活動で、5年生と幼稚園児がペアになり、幼稚園児が踊りの振り付けを教えてもらう経験でした。

どうしたら踊りの振付を覚えることができるのか、子ども同士で声を掛け合いながら取り組む姿がありました。その中に個別の支援を必要とする幼稚園児もいました。保育者が遠くから見守る中、5年生がゆっくりと動きを伝えたり、1つの動きごとに区切って教えていたり、わかりやすいように自然に関わっていたのが印象的でした。

その子どもは、言葉や体で表現しながら楽しんで覚えていました。保育者のかかわりは、必要な時にだけ、そばでそっと声かけをするような援助をしていました。幼稚園児も5年生も、保育者のかかわり方を日ごろからよく見ており、それがモデルとなって子ども同士が支え合いながらお互いに学び合っているのだろうと感じました。

また、幼稚園の給食当番活動では、当番の順番が子ども達手作りの絵カードで黒板に掲示さ

れており、自分がいつ何の当番をするのかを、見てすぐに分かるように視覚的な環境構成がされていました。個別の支援を必要とする子どもは、自分の当番がいつ何をするかわからず、カードの前に立っている姿が時もありました。しかし、保育者には「自分で周囲に伝える力をつけたい」という願いがあり、時には見守り、時にはまわりの子ども達に伝えられるような援助をしていました。

個別の支援を必要とするかどうかに関わらず、すべての子どもが生涯にわたって、伸び伸びと社会生活を送るためには、1人ひとりの困りを、保育者や保護者だけでなく、周囲の子どもも理解して適切な支援をすることが大切であると実習を通して改めて感じました。まさに、共に育ちあう保育の実践が現場でされており、自らの専門性を意識する体験となりました。